



UTCMES ニュースレター

VOL.7 2015

1. 湾岸諸国における男性の教育格差とプレッシャー 1	(3) タジキスタンのゾロアスター教遺跡調査 (2014年)
2. 講演会・ワークショップ報告記 2	4. 中東地域のいま 9
(1) Exploring Vulnerability and Agency through Women's Networks in Saudi Arabia	イエメン危機 - 現地に暮らす市民の視点から
(2) Reflections on Iranian Sexuality	5. センターの活動から 11
(3) イスラーム圏のマイノリティの今	2015年 GCC DAYS IN JAPAN 参加記
(4) 「幸福のアラビア」は幻想なのか: 他国の言説に翻弄されるイエメン	6. そのほかの便り 12
(5) 日本社会における女性の地位: スウェーデンとアラブ世界の対比から何が見えてくる?	(1) 駒場博物館におけるオマーン展「Omani Corner at Komaba」の現在の展示について
3. 研究案内 6	(2) スルタン・カブース・ローズ
(1) 西部インド洋の歴史研究とムンバイ公文書館	(3) 杉田英明教授、ザード首長書籍賞を受賞
(2) 君府図書館雑感	7. スタッフ・発行情報 12

1. 湾岸諸国における男性の教育格差とプレッシャー

東京大学大学院総合文化研究科 中東地域研究センター特任准教授
辻上奈美江

2014年、湾岸諸国の教育に関する衝撃的な著書が出版された。著書は、UAEのラアス・アル=ハイマに拠点を置く「政策研究のためのアル=カースィミー基金」の常任理事ナターシャ・リッジによる『湾岸諸国における教育とジェンダー逆格差』である。その書名が示す通り、同書は、湾岸諸国における男女の教育「逆」格差を鋭く指摘している。

先進国であっても発展途上国であっても、教育の男女格差といえば、一般的に女性に不利な状況と認識されてきた。湾岸諸国もその例外ではなく、昔前までは女性の識字率は男性に比べてずいぶん低く抑えられていた。女子教育の必要性が訴えられることはあっても、「男子教育」にその照準が定められることはほぼなかった。

ところがその男女格差に逆転現象が起き始める。9.11同時多発テロ事件において、ハイジャック犯の大多数を湾岸諸国出身者が占めていたことが、湾岸諸国の政府や人びとにとって危機であったことは間違いない。サウジアラビアをはじめとする湾岸諸国は、過激主義との決別を明確に打

ち出した。「性差別的政策」も批判の対象となったため、改革の明示的あるいは暗示的な柱のひとつが女性のエンパワーメントとなったことは、湾岸のいずれの国にも共通していた。

原油高に支えられて好況となった2000年代の湾岸諸国では、高等教育に手厚く資金が投じられたため、男女両方の高等教育進学に拍車をかけた。サウジアラビアでは、1990年代までは総合大学は一桁しかなかったが、2000年代以降、地方都市にも建設されるようになり、2013年には国立・私立を合わせて総合大学数は34となった。カタールやUAEには、いわゆる「学園都市」が出現し、欧米の一流大学の分校が次々と建設された。

政府による教育部門への投資に真っ先に乗ったのが、女性たちであった。概して女性労働参加率が低い湾岸諸国において、大学進学は女性やその親にとって「リスクの低い投資」であったはずである。高校を卒業しても、女性が就労の機会に恵まれることは稀であったし、就労の必要がないほど経済的に恵まれていた人びとも多かつ

た。中下層の人びとにとっても、幸い、国立大学の授業料は無料であるし、大学生に手当てを支払う国もある。高卒でも軍隊や警察への就職口があり、また将来家族を経済的に支える義務を負う男性にとっては、大学進学は天秤にかけられるべき選択であったが、そのような選択肢の少ない女性たちは、より気軽に大学に進学していった。

結果的に、湾岸諸国では、女性の大学進学者数や大学卒業者数が、男性を上回るようになった。このことは、9.11後、女性のエンパワーメントに力を注いできた湾岸諸国にとって、一見すると非常に都合の良い結果であった。

だが、リッジは、そのような都合の良い事実の裏で取り残された男子教育に危機感を示す。逆格差が起こる要因のなかには、湾岸諸国が経済的に恵まれていたからこそ、給与も地位も低い教員は男性たちが就きたいと望む職業ではなく、優秀な男性教員の育成に成功しなかったという教員側の問題点も指摘された。

ところで、サウジアラビアに進出するある日本企業では、半年前から試験的にサウジ人女性を雇用している。同企業上層部は、この試験的取り組みは期待以上の結果を生み出したとして、今後も女性を雇用することを検討しているという。女性の失業

率は男性の失業率を上回っているとはいえ、今、民間企業でも女性の労働力が高く評価され始めている。

他方で、「家計は男性が支えるべき」とする社会規範には、それほど大きな変化はない。「性差別的」と非難されてきた湾岸諸国のジェンダー政策には、実際には女性の教

育レベルが男性を凌駕する予想外の結果と、しかし男性が依然として家計の担い手で居続けなければならないという男性へのプレッシャーをかける結果をもたらした。ジェンダー研究は、女性のみならず男性にも配慮すべきことが認識されて久しいが、湾岸諸国のジェンダー秩序を捉える

上で今、男性にフォーカスすることが強く求められていることを本書は訴えている。

Ridge, Natasha. *Education and the Reverse Gender Divide in the Gulf States: Embracing the Global, Ignoring the Local* (Amsterdam: Teachers College Press, 2014).

2. 講演会・ワークショップ報告記

(1) ワークショップ

“Exploring Vulnerability and Agency through Women's Networks in Saudi Arabia” 「サウジアラビアにおける女性のネットワークから探る脆弱性とエイジェンシー」

日 時：2015年1月20日(火)

13:00-15:00

場 所：東京大学駒場キャンパス 18号館 4階コラボレーションルーム3

登壇者：辻上奈美江(本学総合文化研究科特任准教授)

：ワファ・アル＝トワイジリ(サウジアラビア・イマーム・ムハンマド大学准教授)

主 催：科学研究費基盤(B)「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」(研究代表者：高橋英海)

共 催：東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム(IHS)」教育プロジェクト5「多文化共生と想像力」 「中東・アフリカ」ユニット

東京大学中東地域研究センターは、科学研究費基盤(B)「中東・北アフリカ地域の

イスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」(研究代表者：高橋英海) および、本学総合文化研究科リーディング大学院プログラム「多文化共生・統合人間学」プロジェクト5「多文化共生と想像力」との共催で、サウジアラビア・イマーム・ムハンマド大学のワファ・アル＝トワイジリ准教授を招き、本センターの辻上奈美江特任准教授が“Exploring Vulnerability and Agency through Women's Networks in Saudi Arabia” 「サウジアラビアにおける女性のネットワークから探る脆弱性とエイジェンシー」と題する報告を中心としたワークショップを開催した。報告をうけて、トワイジリ氏が詳細に見解を述べた。

辻上氏は、これまでのサウジ社会に関する研究動向を通観して、親族集団のネットワークが果たしている役割が十分検証されていないことを指摘し、この点に着目することで、サウジ女性のもつ主体性や脆弱性を明らかにすることを研究報告の目的とする。具体的にはリヤド市における女性親族の週末会合を取り上げ、数家族の事例を分析し、その女性親族による会合が女性のネットワーク形成に役立っていることや、女性の安心や安全保障に寄与していることを明らかにした。女性は互いに助け合い、仕事の斡旋、使用人の紹介、情報の共有、その他の問題の解決にもこの会合を利用しているのである。今後は、こうしたネットワークの恩恵に十分に気づいていない女性を研究する必要があるとのことであった。

辻上氏の報告をうけて、トワイジリ氏はその研究上の意義に加えて、個人の経験からネットワークがどのように機能しているかを説明し、今後の研究の展望について

も言及した。氏は、近年サウジアラビアは大学の門戸をサウジ人以外にも広く開き、また多くのサウジ人が海外の大学に学んでいることを指摘した上で、こうした親族間のネットワーク以外のネットワークも非常に重要であり、相互補完的な関係を有していると述べた。

質疑においては、サウジにおける都市生活が近年のものであることから、こうしたネットワークが農村社会とどのように関係していたのか、その起源について質問がなされ、また外国人使用人の役割、他地域との比較などについても議論された。

(2) 特別講演会

“Reflections on Iranian Sexuality” (イランのセクシュアリティが映し出すもの)

日 時：2015年4月22日(水)

14:55-16:40

場 所：東京大学駒場キャンパス8号館 112教室

講演者：パルディース・マフダヴィー (米国ポモナ・カレッジ准教授)

東京大学中東地域研究センターは、国際交流基金の助成によって早稲田大学に滞在中のパルディース・マフダヴィー氏(ポモナ・カレッジ准教授)を招き、“Reflections on Iranian Sexuality”(イランのセクシュアリティが映し出すもの)と題する講演会を開催した。マフダヴィー氏は、主として2000年から2007年まで継続的にイランにおいて調査を行い、そこで得られた知見にもとづき研究を行ったとのことである(この研究をもとに博士論文を執筆したそうである)。一方現在は湾岸地域における、東南アジア出身家事労働者に関する研究を進行中であるという。今回の講演会では、主として前者の成果に





基づく、イランのセクシュアリティに関する講演を行った。この報告で氏が注目するのは、1990年後半以降からイラン社会において性を取り巻く環境が大きく変化し、特に2000年以降顕在化したことであり、これを「性を取り巻く革命sexual revolution」と呼んでいる。氏の現地調査は主に18歳から35歳の女性を対象とし、公園、カフェ、ダンス教室、美容院などで調査を行ったとのことである。氏が報告の中で提供した情報は多岐にわたる。興味深かった論点を取り上げるならば、イラン女性のいわゆる「革新的」な化粧や服装がイスラーム体制に対する批判を含蓄していること、平均初婚年齢(26歳)と平均性交渉経験年齢(16歳)の乖離、未婚者に対する性教育の欠如や、婚姻外性交渉の原則的禁止に伴うさまざまな問題の顕在化、HIV感染者の増加、比較的開放的な考えを持つ親の、子供の服装等に与える影響、2009年緑の運動との関係、などが挙げられる。地道な現地調査によって獲得された知見には参加者も得るものが大きかった。

質疑においては、婚姻外性交渉が女性の評判に与える影響と、そうした悪評を如何に回避しているのか、といった女性側のいわば「戦略」に関する点や、「性を取り巻く革命」の起源、サウジアラビアなど他のムスリム諸国との比較、HIVの感染と同性愛の問題、イラン女性の家族・親族に対する「顔」と外向きの「顔」の違い(つまり、家族の前では信仰深い女性として振る舞い、友人の前や学校では前衛的・開放的な気風をまとう)など、議論は多岐にわたった。報告者として驚いたのは、議論のなかで報告者が指摘したことなのだが、一定数の女性が、交友関係を親族・近所に悟られないために、テヘラン市内でもわざわざ自宅から離れたところに赴き、交友関係を形成している事例である。本学の院生、学部生に加えて、学外のイラン社会研究者も参加し、充実した講演会となった。

(3) ワークショップ 「イスラーム圏のマイノリティの今」

日 時：2015年6月4日(木)
16:00-18:00

場 所：東京大学駒場キャンパス 18号館
4階コラボレーションルーム3

登壇者：菊地達也(東京大学大学院人文社会系研究科 准教授)

辻上奈美江(東京大学総合文化研究科 特任准教授)

三代川寛子(人間文化研究機構 地域研究推進センター)

高橋英海(東京大学大学院総合文化研究科 教授)

共 催：科学研究費基盤B「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数民族派と弱者に関する総合的研究」(研究代表者：高橋英海)

東京大学中東地域研究センターは、科学研究費基盤B「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数民族派と弱者に関する総合的研究」(研究代表者：高橋英海)との共催で、「イスラーム圏における少数民族マイノリティの今」と題するワークショップを開催した。科学研究費プロジェクトの研究代表者高橋英海ほか、分担者である菊地達也(本学人文社会系研究科)、辻上奈美江(本学総合文化研究科)、三代川寛子(人間文化研究機構地域研究推進センター)が登壇し、それぞれ研究報告を行った。報告順に内容を簡潔に紹介したい。

●菊地達也

「「媒介者」としてのシーア派イマーム」
まず、菊地は「「媒介者」としてのシーア派イマーム」と題する報告を行い、主としてイブン・タイミーヤのシーア派観を論じた。氏によれば、イブン・タイミーヤは、シーア派をひとつの集団とみなして、すべてをムルタッド(棄教者)と憎悪していたわけではなく、ドゥルーズ派、アラウィー派(ヌサイリー派)を最も敵視し、ついで、イスマール派、最後に12イマーム派という順番を与えていた。ドゥルーズ派からイスマール派までをムルタッドとみなすが、12イマーム派については、「誤ったムスリム」として改悛の可能性を残していた。しかし、教義の点から言えば、12イマーム派とイスマール派はさほどの差異はなく、イブン・タイミーヤのこうした「格付け」は、単

純な教義論争というだけでなく、当時イスマール派を奉じてエジプトを支配していたファティマ朝に対する敵愾心があるのではないか、と述べた。ついでイブン・タイミーヤと、同時代のシーア派碩学であるアッラーマ・ヒッリーとの論争を分析し、ここでイブン・タイミーヤは、ヒッリーを一方的にシーア派ということ否定するのではなく、彼の学識を認めながら文献的に論難していることを示した。またヒッリー自身がスンナ派の文献を積極的に利用して議論を構成していたこととの関係も語られた。

質疑においては、外国における先行研究の特徴や、近代過激なスンナ派思想のイデオログとなっているイブン・タイミーヤ観の再構築の必要性、イブン・タイミーヤのファティマ朝観、「イスラーム国」などの思想潮流との関連性などが論じられた。

●辻上奈美江

「サウジ女性の主体性と脆弱性」
続いて、辻上は、「サウジ女性の主体性と脆弱性」に関する報告を行った。まず、辻上は、女性を「弱者」ではない視点から描く必要性を述べた上で、これまでのサウジアラビア研究の主たる対象が定住民・部族、national identityといった論点にやや偏っていると述べた。それにたいして、血縁等を通じたつながりを利用した相互扶助を中心に、女性の生存戦略や相互扶助のネットワークから零れ落ちる女性の脆弱性を、現在研究しているという。氏が調査対象としているのは、週末の女性親族の集まりである。一見するとたわいもない会話をするために集まっているように見えるが、頻繁に会うことによって絆を確かめ合い、それぞれが抱える問題を共通の課題として、直接・間接に解決を試みる実態が紹介された。これは、報告者の豊富な現地調査の経験を踏まえた報告は非常に興味深い知見を提供するものである。女性親族の広がり(同母姉妹だけでなく、従姉妹が





含まれること)や参加メンバーの入れ替わり、関係の途絶などが、多様な事例から浮き彫りにされた。

質疑においては、女性の就業率、家計における女性収入の寄与の度合いや、サウジなど湾岸において雇用されているメイドと、使用者たるサウジ女性の権力交渉の実態など、多様な論点が確認された。また女性親族ネットワークに入れない女性の脆弱性や、「ミスヤール婚」といわれる扶養義務を伴わず、夜をともにしない結婚形態についても議論された。

●三代川寛子

「20世紀初頭のエジプトにおけるコプト・キリスト教徒の民族・宗教的アイデンティティの構築」

三代川は、「20世紀初頭のエジプトにおけるコプト・キリスト教徒の民族・宗教的アイデンティティの構築」と仮題して、現在進めている研究全般の概要を報告した。氏が注目しているのは、1.コプト語復興運動、2.ナイルズ祭復興運動、3.コプト博物館の設立と国有化、の三点であり、いずれも興味深い内容であった。1「コプト語復興運動」は、教会典礼用語であったコプト語を、19世紀に生活言語として復活させようとした試みであり、この歴史的背景やその展開が紹介された。2「ナイルズ祭復興運動」では、もともとコプト暦の元旦にあたる祝祭の歴史の変遷が紹介され、その後近代化・西洋化との関係でコプト暦を守るために作り出された経緯が論じられた。3.コプト博物館に関しては、エジプト近代化の中で、コプト教徒によって私的に設立された博物館の展示の特徴や国有化にいたる流れが説明された。いずれも、コプト教徒が、エジプトの多様なナショナリズムのひとつとして、イスラーム以前のエジプトの代表としてのコプト文化を紹介し、生き残りを図っていた実態が提示された。

質疑においては、コプト博物館とヨー

ロッパ人の関係や、博物館設立とオリエンタリズムとの関係、アラブナショナリズム、イスラーム主義とコプトのかかわり、コプト語復興運動とシリア語復興運動の類似性など、さまざまな観点から意見が交換された。

●高橋英海

「サイフォー(剣の年):1914年～1918年のシリア人・アッシリア人虐殺とその記憶、そして2014年」

最後に、科学研究費研究代表者の高橋英海が、アナトリア東部におけるアルメニア教徒・アッシリア教徒(シリア語住民)大虐殺事件から100年であることを念頭に置き、100周年問題とシリア・イラクで現在進行中の少数派に対する迫害問題を紹介した。アルメニア教徒の大虐殺は、多様な見解が入り乱れているにしてもよく知られた事件であるが、シリア語住民の虐殺はあまり知られていない。この虐殺は、アルメニア人虐殺に巻き込まれたもので、大雑把に言えば、この地域のシリア語住民の3分の1が殺害され、3分の1が逃亡し、残る3分の1が現地で生き延びたとされている。被害を受けたシリア語住民による記録も残されており、一部はキリスト教の奇跡譚や殉教伝に近似しているという。氏はこうした現象を、虐殺の被害を受けた信仰者が、その惨状を説明する言葉が見つからずに宗教的な語りへと転化させたと見る。一方で、この話題は、トルコ共和国では禁忌とされており、大虐殺を否定する論調が学界において主流であり、反論本が多数出版されていることが指摘された。また、氏は現在シリアやイラクにおいて少数派であるキリスト教徒は生命財産の危険にさらされていることを、多様な画像資料をもとに紹介した。

質疑において、悲惨な事件を殉教伝風に仕立てることはコプト教徒の間でもよく見られることが指摘された。また、アッシリア教徒虐殺がイラン領内で発生した点についても質問があり、第一次世界大戦中にオスマン帝国とロシアとの戦線が、中立を宣言していたイラン領内でも展開し、その際に、イラン西部のキリスト教徒が犠牲になったことが示された。

以上、中東におけるイスラーム内の少数派、宗教マイノリティとしてのキリスト教徒、さらには実は弱者の範疇では語りきれ

ない女性の多様性という、大きく分けて三つのテーマについて報告と質疑が行われた。こうした三つのテーマが一堂に会することは極めてまれであり、今後、最新の研究成果の公刊やシンポジウムの開催など共同研究の成果公表が期待される。

(4) 特別講演会

「幸福のアラビア」は幻想なのか：他国の言説に翻弄されるイエメン

日 時：2015年7月3日(金)

17:00-18:30

場 所：東京大学駒場キャンパス18号館
コラボレーションルーム3

講演者：佐藤寛(アジア経済研究所 上席主任調査研究員)

野中亜紀子(前駐イエメン日本大使館専門調査員)

緊迫が続くイエメン情勢にかんがみ、長年イエメン研究に携わってきたアジア経済研究所の佐藤寛氏と、2015年3月までイエメン・サナアに居住していた前駐イエメン日本大使館専門調査員の野中亜紀子氏を招き、講演会が開催された。

まず、佐藤寛氏が、今日のイエメンにおける紛争の根源を明らかにすべく、イエメンという地域の歴史的背景を解説した。具体的には、イエメンにおける南部と北部の歴史的關係、周辺国からの影響、19世紀イギリス・オスマン帝国間の力関係によるアラビア半島分割の影響、20世紀イギリス撤退と1990年の南北イエメン統一への道程など、今日のイエメンを形成した流れが説明された。その上で、サーレハ大統領による政権運営の特徴、2011年から始まるアラブの春がイエメンにもたらした影響、およびサーレハ政権退陣にいたる過程も述べられた。

つづいて、野中亜紀子氏が、サーレハ大統領退陣から現在至るまでのイエメンの情勢を、2015年3月まで現地に滞在し



ていたという貴重な経験を踏まえて、詳しく説明した。氏によれば、ハーディーへの政権移譲直後は、若干の不安定要素はあったものの、インフラ整備も進み、外国資本も進出するなど、比較的安定していた。それが、2012年以降物価上昇が進み、政権への不満が高まるなかで、ホーシー派がそうした不満の代弁者として政権批判を強め、当初は市民もそうした批判に同調さえしていたという。ホーシー派の政権批判の背景としては、しばしば語られるようにハーディー政権の打ち出した連邦素案への不満があり、北部からサナアへ行進する途中に多くの部族集団を政権批判という観点から抱き込んだことがあるという。これはスンナ・シーアの対立ではなく、あくまで政権批判の延長線上であったことが指摘された。その上で、野中氏は、ホーシー派によるサナア掌握の過程、市民の反応、サウジによる空爆の影響など詳しく解説し、市民のホーシー派への反感の高まりとサレハ時代への郷愁感情、とくにサレハの息子アフマドへの待望論が発生している現状を紹介し、今後の日本の対応や支援のあり方にも言及した。(詳しくは野中亜紀子氏寄稿記事参照)

最後に佐藤寛氏が、今後の展望として、連邦制の妥当性を論じ、南北ではなく6つの地域に分ける必要性や、米軍主導の無人飛行機(ドローン)によるアルカーイダ系組織攻撃の危険性なども論じた。また、日本の支援のあり方として、瓦礫撤去という長所を生かす点や港湾整備の重要性も指摘した。なお、シーア派(北部)対スンナ派(南部)という宗派対立で語られるイエメン内の抗争は、あくまでメディアや外国によって作り出された虚構であり、こうした見方を排除しなければならないと説き、外部勢力が、スンナ・シーアの差異を強調して自らの利益をもとに介入することにより、「予言の自己実現」が起こることを避けなければならないと述べた。

質疑においては、ホーシー派とイランの関係、ドローンのイエメン国内での活動の起源、アルカーイダ系組織とサレハとの関係、サウジによる空爆に対するアメリカの態度の変化など、多岐にわたる議論が行われた。

参加者は大学生・院生から、研究者、企業関係者、官庁関係者、ジャーナリストなど合計25人におよび、この問題にたいする関心の高さがうかがえた。



(5) 特別講演会
「日本社会における女性の地位：スウェーデンとアラブ世界の対比から何が見えてくる？」

日 時：2015年7月8日(水)
 14:55-16:40

場 所：東京大学駒場キャンパス8号館
 112教室

講演者：森元誠二(東京大学客員教授、在スウェーデン日本大使)

7月8日、本学客員教授であり、在スウェーデン日本大使の森元誠二氏を招き、「日本社会における女性の地位：スウェーデンとアラブ世界の対比から何が見えてくる？」と題する講演会を開催した。まず、森元氏が「スウェーデンにおける女性の活躍」という題目の講演を行い、続いて本センターの辻上奈美江氏がアラブの事例と比較してまとめた。まず順番に、森元氏の講演内容を簡単に紹介する。森元氏は、高度な福祉国家「スウェーデン・モデル」を概観し、大きな国民負担と対価の関係ともいえる大きな政府・高度な福祉国家の特徴を示し、そのなかで、徹底した男女平等が指向されたと述べた。専業主婦はわずか2パーセントに過ぎず(日本は26パーセント)、国会議員における割合、内閣における女性閣僚の割合、管理職の割合など、数字を紹介した。実際にスウェーデンは、ジェンダー不平等指数、ジェンダーギャップ指数ともに世界第4位という数値を達成しているのである。森元氏は、こうした状況にいたる道筋を19世紀にさかのぼって説明し、北方に位置し貧しい農業社会であったスウェーデンが、工業化の過程で労働力の必要性から、女性の社会進出を促した側面を示した。特に、戦後政府の積極的な後押しにより、働く女性を念頭に置いた税制が制定され、1991年には配偶者控除制度が廃止されるに至ったという。一方で、子育てへの手厚い支援を実施し、それがとくに男性も育児に参加し、家

事を分担するような方向で政策誘導がなされている(たとえば、育児休暇間の手当てを満額受け取るためには、男性も育児休暇を取ることが必須になっていることなど)。

氏は、もちろん、スウェーデンの現状がすべて理想を実現しているわけでもないことにも言及した。男女平等といっても、職種による男女比の隔たりが大きいことや、女性にパートタイム勤務が多い、女性の病気休暇が男性に比して多い、離婚が多いなど、があげられた。

次に、辻上氏が、アラブとの比較から、まず、男女平等・ジェンダー不平等指数等が、西ヨーロッパの価値観に基づいており、それをたとえばアラブ諸国に当てはめることへの違和感を述べた。また、男女平等とは、女性の権利の拡大と同時に、女性の負担の増加も意味していることから、サウジアラビア女性には、根強い違和感があることを指摘した。

質疑においては、男女平等を指向するスウェーデンにおける「女性らしさ」「男性らしさ」のあり方や、東南アジア・マレーシアにおける女性進出も含めた比較、男女平等を進めることによる日本社会への影響など、多様な議論がかわされた。

このほか、2015年1月31日(土)に、グルジアからラド・ミラナシュヴィリ氏(ウダブノ科学財団)とテモ・ジョジュア氏(イリア国立大学)を招き、「Religions and States in the Caucasus: Between Christianity and Islam」と題するワークショップを開催し、また、2月21日(土)には、シリア正教徒合唱団指導者のイーサー・ハビール氏を招き、「シリア正教会の音楽の伝統：歴史と現状」と題する講演会を開催した。

(執筆：阿部尚史)



3. 研究案内

(1) 西部インド洋の歴史研究とムンバイ公文書館

サーヴィトリバーイー・プレー・ブネー大学
歴史学部博士課程
片倉鎮郎

筆者は現在インド・マハーラーシュトラ州ブネー市に留学し、オマーンのマスカトほか19世紀西部インド洋の主要港市について研究を進めている。以下、西部インド洋史研究のためのマハーラーシュトラ州立公文書館ムンバイ本館 (Maharashtra State Archives, Mumbai)、通称ムンバイ公文書館所蔵旧ボンベイ政庁文書と、同公文書館利用の実際について簡単に紹介し、この分野に関心をもつ方々の参考に供したい。ただし、筆者が承知しているのは主として18世紀末から19世紀にかけての資料であるため、記述に偏りが生じることを予めお断りしておく。また、以下はすべて2015年5月現在の情報である。

ムンバイ公文書館はマハーラーシュトラ州各地の州立公文書館とともに州政府公文書局 (Directorate of Archives) によって運営され、その本部としてムンバイ市南部のフォート地区に位置するエルフィンストーン・カレッジ (Elphinstone College) の建物の一角を占める。英領期ボンベイ管区首府の公文書館にふさわしく、旧ボンベイ政庁文書の主要部分を所蔵している。所蔵資料の概要については Sanjiv P. Desai & R. S. Pednekar (eds.) 1978. *The Hand Book of the Bombay Archives*. Bombay: Department of Archives を参照されたい。

1773年のノース規制法によりベンガル政庁がマドラス・ボンベイ両政庁を監督、統

制する体制となって以降も、イギリス東インド会社 (のち英領インド) 政府のインド亜大陸以西に関わる外政は、1874年にインド総督府に移管されるまで主としてボンベイ政庁が担った。したがって、出先機関よりもたらされる西部インド洋各地についての情報は、まずボンベイに集約されることとなった。旧ボンベイ政庁文書、わけてもその外政担当部局の関係資料が19世紀西部インド洋沿岸部の歴史研究にとって有用である所以である。

ボンベイ政庁における外政は、1755年の設立以来、機密政務局 (Secret and Political Dept.) が担い、同局は1809年には機密局と政務局とに分離するものの、1820年に政務局として再統合される。1820年まではこれら諸局の日誌 (diaries) が、同年以降は政務局で関係地域ごとに書簡等の原文書をまとめた巻冊 (volumes) が西部インド洋関連史料として重要である。前者については、日誌収載書簡の概要を記した索引付きのカタログが出版されている (V. G. Dighe (ed.) 1954. *Descriptive Catalogue of the Secret & Political Department Series, 1755–1820*. Bombay: Government Central Press)。後者については、インド対外関係史への関心から編まれたカタログが、政務局巻冊を中心に関係資料を整理している (Bhaskar Dhatavkar (ed.) 2003–2008. *Catalogue of Records Pertaining to Foreign Countries (1820–1880)*. 2 vols. Mumbai: Department of Archives; Suprabha Agarwal (ed.) 2012. *Catalogue of Records Pertaining to Foreign Countries (1881–1920)*. Mumbai: Directorate of Archives)。こちらは関係するすべての資料を網羅しているわけではなく、誤記も少なくないが、調査・研究の手がかりとして有用である。

ロンドン英国図書館所蔵の旧インド省文書と比較した場合、旧ボンベイ政庁文書の特長は、何よりも原文書、またはよりそれに近い謄本を手にする点にある。19世紀中葉までの資料の大半は言うまでもなく手稿であり、当時ボンベイから



ロンドンに送られ、現在旧インド省文書となっているものの多くはそれらの謄本である。したがって、筆写過程で復元困難なまでに变形してしまった人名・地名等が、旧ボンベイ政庁文書を参照すれば問題なく読み取れることもままあるのである。

いま一つ、1820年以降のボンベイ政庁政務局文書 (巻冊) に限って言えば、編集の手が入っているがゆえに、政庁における審議の日付を跨いで関係資料を参照することができるという特長がある。この点で、審議の時系列が維持されている旧インド省文書の政庁審議録 (Pシリーズ) とは明確に異なる。目的に応じた使い分けがなされるべきであろう。

それでは、ムンバイ公文書館の具体的な利用法について述べていこう。公文書館関連スペースは書庫を除いてエルフィンストーン・カレッジ2階のフロア西側にある。開館時間は原則10:30から17:00だが、実際には10:00ごろから17:30まで閲覧室で作業が可能である。休館日は第2・第4土曜、毎週日曜および祝日である。

閲覧許可証 (有効期間1年) の取得にあたっては、インドの他の公文書館と同様、旅券 (複写) のほかに、在インド日本公館発給の身元確認状および大学等の申請者所属機関が交付する在籍証明書 (ともに原本) が必要である。閲覧許可証の発行には数週間かかるが、申請が受理された段階で公文書館の利用は可能となるので、短期調査の場合は次回訪問時に受領してもよいし、代理人が受け取ってもよい。

資料の請求にあたっては、備え付けのリスト類や先述した Desai らの便覧を参照してスリップに記入し、出納係に手渡す。一度に請求できるのは資料の形態にかかわらず5つまでである。出納にかかる時間はまちまちだが、通常は1日に2ないし3回が可能である。何らかの理由で人手が少な





い場合は、午前中に請求して昼休み（13時から14時）後に1度ということもある。

書庫の温湿度管理がなされているわけではないので、一般に資料の経年劣化は相当進んでおり、ものによっては特に慎重な取り扱いを要する。19世紀の製本資料の綴じはほぼ解けてしまっているため、ほとんどのものは上から麻紐で縛られて保存されている。

複写はゼロックスコピー、マイクロフィルム、デジタルスキャン画像を収めたCD-ROMという3つの形態で可能である。申請フォームにアーキヴィストの署名を得て会計係で費用を支払い、引換証ともなる領収書を受け取る。スキャンの場合、外国人はCD1枚あたり1000ルピーという料金設定である。ページ数を勘案してアーキヴィストが金額を見積もるが、通常CD1枚には200ページ前後の画像が入る。見積もりよりも実際のCD枚数が増えた場合は、受け取り時に追加の支払いをすることになる。必要な時間は通常1ヶ月程度だが、時期によっては半年近くかかる場合もある。郵送には対応していないものの、領収書（複写可）さえあれば本人以外が受け取ることも可能である。

昼食は周辺の食堂、レストラン等のほか、カレッジの休暇期間以外は学食（canteen）でとることができる。エルフィンストン・カレッジはムンバイ大学に附属（affiliated）し、3年間の学士課程教育を行うシニアおよび2年間の後期中等教育を行うジュニアの両カレッジからなるため、日本の高校生にあたる年頃の学生も多くなる。日本の大学よりもさらに若やいだ雰囲気や、ときに隣席との会話にも支障をきたす賑やかさに、初めて訪れた人は少々面食らうかもしれない。

ムンバイ公文書館所蔵資料を活用する西部インド洋史研究は、亜大陸沿岸部に関するものを除けば、国際的に見てもまだあまり例がない。小稿が日本人の手でこの分野

における新たな研究成果を生み出すことに多少なりとも貢献できれば幸いである。

附記 本稿執筆の前提となる2015年5月のムンバイ公文書館調査は松下幸之助記念財団およびりそなアジア・オセアニア財団からの助成を受けて行った。また、小川道大氏には草稿段階でコメントを頂いた。記して感謝申し上げる。掲載の写真はエルフィンストン・カレッジ外観のみ Ting Chen氏、その他は筆者の撮影によるものである。

(2) 君府図書館雑誌

東京大学大学院人文社会系研究科
アジア文化研究専攻博士課程
山下真吾

現在のトルコ共和国最大の都市にして、かつてのオスマン帝国の都であったイスタンブールは、紀元前にも遡る歴史を有することでも知られている。東ローマ帝国の皇帝コンスタンティヌス大帝にちなみコンスタンティノポリスと呼ばれたこの都市は、オスマン朝スルタン、メフメト2世による1453年の征服後も、しばしばヨーロッパ人やトルコ人からこの名前で呼ばれることとなった。君府（クンプ）とはその当て字である。また同都市は2010年に欧州文化首都として選ばれている。本稿では、このイスタンブールの文化的歴史の一端を担う古文書が納められた写本図書館のうち、主要なものをご紹介します。

まず、その代表ともいえるのがトプカプ宮殿博物館図書館である。同図書館は、メフメト2世によって建てられ、長らくオスマン帝国の主たる宮殿として使われたト



プカプ宮殿の宝物庫などに納められていた諸々の貴重写本の蔵書によって知られている。これらの写本の中には、スルタンのために著述され、挿絵付の豪華写本として作成された作品も多く含まれている。そのコレクションは、アラビア語、ペルシア語、オスマン語の諸作品が中心である。ただし、それ以外に例えばギリシア語の蔵書もあり、インソップ寓話や聖書の写本などが見られる。

トプカプ宮殿のそばに建ち、隣接するブルー・モスクとあわせてひととき存在感を放っているのがアヤソフィアである。ビザンツ皇帝ユスティニアヌスによって教会として建てられ、イスタンブールの征服後はモスクとして利用されたが、現在は博物館として一般に公開されている。ちなみに現在アヤソフィアを訪れると、ここを住処にしている猫の案内係で、オバマ大統領にもかわいがられたグリに会えるそうである。また、18世紀のスルタン、マフムート1世により建てられ、アヤソフィアに併設されている図書館を見ることもできる。アヤソフィア内側の一画、金の金網で仕切られた空間がそれである。その蔵書コレクションは次に述べるスレイマニエ図書館に移転され、現在は図書館としては使用されていないが、絵付タイルなどで装飾された閲覧室は一見の価値ありである。

宮殿やアヤソフィアのある地区から路面電車トランヴァイで2~3駅行くと、グラド・バザールやイスタンブール大学などがある旧市街の中心部に出る。この地区の一画を、16世紀中葉にスルタン・スレイマン1世によって建設されたスレイマニエ・モスクとその付属施設群が占めている。そして、今の大学にあたるスレイマニエ・メドレセと呼ばれた学校施設があった区画は、現在スレイマニエ写本図書館とし

て利用されている。

スレイマニエ図書館の元来のコレクションは、スルタン・スレイマンや、他の人々によって寄贈された一千数百冊のアラビア語、ペルシア語、オスマン語の写本である。しかしその後、イスタンブール市内の様々な図書館コレクションが移転され、現在ではイスタンブールでも最大級の写本図書館となっている。これらかつての写本図書館の蔵書コレクションは、元々あった図書館の名前で呼ばれており、これらの中でもスルタン・メフメト2世によって建てられたファーティヒ・モスクとその付属施設群に属していた図書館コレクションであるファーティヒ・コレクションと、前述のアヤソフィア・コレクションが、蔵書の量および質で頭一つ飛びぬけている。一方、イスタンブール市内の写本図書館の内、旧市街にあるキョプリユリュ、ヌールオスマニエ、ラーグブ・パシャ、アートゥフ・エフェンディ図書館、アジア側のウスキュダルにあるセリミエ図書館は、独立した写本図書館として現在も運営されている。スレイマニエ図書館の蔵書は今ではデジタル化が進み、閲覧室に備え付けのパソコン画面上から蔵書を閲覧することができる。

スレイマニエ図書館のわきからイスタンブール大学の本部キャンパスの横を歩いてトランヴァイの通りに入る道の途中には、イスタンブール大学附属稀覓本図書館がある。同図書館は、19世紀後半から20世紀初頭のスルタン、アブデュルハミト2世が使ったことで知られるユルドゥズ宮殿から移転された蔵書や、その他の図書館、個人の旧蔵書を収めている。また、特に歴史や文学のジャンルに属する貴重な写本が多く見いだされることでも有名である。



一方、スレイマニエ図書館裏手の坂を下り、ヴァレンス水道橋とイスタンブール市庁舎の間の大通りを西に歩くとミット図書館が見える。同図書館は、アリー・エミーリー・エフェンディーによって1916年に開設された。また、研究者、著述家として知られた同氏が収集し、ミット図書館に寄贈した本の中には、特に歴史、文学のジャンルに属する多くの稀覓本や、他の図書館の貴重な蔵書の写し、多数の刊本などが見られる。また研究で疲れた目を休めるために、同図書館の中庭で憩うこともできる。

(3) タジキスタンのゾロアスター教遺跡調査(2014年)

東京大学大学院総合文化研究科
学術研究員
青木 健

2014年9月16～25日の期間、筆者はゾロアスター教遺跡調査の為に、タジキスタン共和国を訪れた。このパミール高原西麓に広がる国は、嘗て中央アジアで支配的だったソグド文化の名残を濃厚に遺している。到着最初の夜に乗ったタクシーの運転手に、あまり期待せずにペルシア語で話しかけたところ、非常に明瞭に通じたので驚いた。おまけに、その運転手の名前は「ローシャン」と云った。世界史上では、ソグド人の父と突厥人の母の混血児とされる安祿山(757年没)のソグド語名が、正に「ローシャン」である。まさか、この古式床しい名前が今でもタジキスタンで普通の男性名として使われているとは露思わず、到着5分にして、確かに古えのソグド文化の故国へ来たとの感が強まった。

今回の調査の中心課題は、ペルシア語で「ゾロアスター教神官の山」を意味する「ムグ山」である。8世紀初頭に、サマルカンドとペンジケントを支配するソグド王デーヴァシュティチが、アラブ人イスラーム教徒軍に敗れた後で最終的にここに立て籠もったものの、奮戦空しく敗れて捕らえられ、とうとうソグド人の独立王国が終焉した歴史的な舞台である。尤も、単にそのような故地に佇んで感慨に耽ろうとい



▲ザラフシャン川対岸から望むムグ山

うのではない。この悲劇の歴史は長らく不明のままだったが、1933年にこの城砦の洞窟からソグド語の文書が発見され、レニングラードの碩学リフシツが解読したことによって史実が明らかになったのである。私個人にとっては、博士課程2年生の時に、言語学科のイラン語文献学の講読で初めて読んだ写真版のソグド語文書が、この「ムグ山文書」であった。もちろん、中世ペルシア語の知識では歯が立たず、専ら教授が解読していくのを聞き入っていただけなのだが……それはともかく、荒涼たる山塊の麓からそのようなソグド語文書が大量に発見されたのは大きな驚きで、周辺の遺跡や一万に一つの確率で遺されているソグド語文献を調査するのが、今回の旅の目的であった。

首都ドシャンベから旧ソ連製のジープ・ワズに乗り、余りの悪路に生きた心地もしないまま、ザラフシャン山脈を標高3,372メートルのアンザーブ峠で越えた。ジープの後部座席右側の窓からは、ガードレールなど一切見当たらないヘアピンカーブの下に千仞の谷が垣間見え、座席の左側では、タジク人ガイドが羊の脳味噌を乾燥させた物体をポリポリ食べているので、どちらを向いてみようもなかった。

やっとザラフシャン山脈を南から北へ越えると、そこにはパミール高原からの雪解け水を湛えて翡翠色に澄んだザラフシャン川が流れていた。このザラフシャン渓谷こそ、嘗てソグディアナと言われたソグド文化の中心地である。学部学生の頃に習ったペルシア語詩にしばしばこの清流が詠み込まれていたが、あれから20年余を経て、実物に触れられようとは思わなかった。

このザラフシャン渓谷を下流に向かって西進していくと、確かにムグ山があっ

た。しかし、複数のムグ山があり、どれが目当てのムグ山なのか、甚だ混乱した。以前にムグ山を訪れようとここに来た或るイラン学者は、全く別のムグ山に案内され、嬉々として帰って行ったなどという故事を聞くに及び、いよいよ慎重にならざるを得なかった。

やっとの思いで探し当てた本物のムグ山は、確かにデーヴァシュティチ王が最後に立て籠もるに相応しく、ザラフシャン川を隔てて街道の向かい側の断崖絶壁の上に聳え立っていた。付近の村人に尋ねると、ザラフシャン渓谷の街道からムグ山に

登るのは不可能で、遥かな迂回路を通過して裏手に出ないと、杣道さえ発見できないとのこと。残念ながら、ムグ山に登るのは、来年を期さなくてはならないようである。

ただ、私は、この山塊のどこかで磔刑に処せられたデーヴァシュティチ王と、彼と運命を共にしたであろうソグド人貴族やゾロアスター教神官たちの為に、対岸からゾロアスター教聖典『アヴェスター』を朗唱しておいた。本当はソグド語版の『アヴェスター』があったはずなのだが、元来口承伝承を旨とするソグド人の間にあって、それらはすっかり失われたので、この

際仕方がない。多少バージョンが違う『アヴェスター』だが、1300年前に滅んだ亡国のソグド人たちにとって、少しは鎮魂の役に立ったのではないかと思う。



▲ヤグノーブ地方におけるザラフシャン川の流れ

4. 中東地域のいま

イエメン危機

ー現地に暮らす市民の視点から

野中亜紀子

元在イエメン日本大使館専門調査員

2015年6月12日、ユネスコ世界遺産に登録されているイエメンのサナア旧市街にあった自宅が、アラブ合同軍の空爆の直撃を受け、崩落した。隣近所の人たち少なくとも5人が亡くなり、私も飼い猫を失った。つい数か月前までのんびりお茶を飲んで生活していた場所なのに、である。

イエメンは、「アラブの春」旋風が吹き荒れた国々の中でも、比較的穏やかに政権交代が実現し、異論はありながらも一定の評価を得ていた。ところが、2014年9月に首都サナアは「ホーシー派」と呼ばれる北部部族勢力に制圧され、さらに約半年後の2015年3月にはサウジ主導のアラブ合同軍による空爆が始まり、「あっ」という間に内戦状態に陥った。

中東の片隅のイエメンという国で、一体何が起きているのか。筆者は2007年から空爆直前の2015年3月までサナアに居住しており、現地の視点からこれを述べてみよう。

民主化移行期間

2011年「アラブの春」の民衆デモにより、30年に及び独裁政権を握っていた当

時のサーレハ大統領は失脚し、湾岸諸国協力会議（GCC）の提示した仲介案により権力委譲が成立した。（2011年11月）このGCC仲介案によれば、イエメンは①挙国一致内閣の発足、②暫定大統領の選出、③包括的国民対話会議の実施、④新憲法の制定⑤新憲法下における大統領の選出、という民主化移行プロセスを経て、真に民主的な国家として再生するはずであった。

2012年2月にハーディー前副大統領が暫定大統領に選出されると、国民の間にはひとまず情勢が落ち着くだろうという安心感と、諸外国から援助金や資本金が入ってくるだろうという期待感が高まった。サナア

市のあちこちにあった道路封鎖や新旧体制派のテント村が撤去され、同時に道路やビル建設が急速に進められ、また外国資本による新規事業や飲食店の開店も見られた。

治安悪化、物価高騰、汚職

しかし、こうした復興の裏では深刻な事態が進んでいた。まずは、治安の悪化である。ハーディー暫定政権は、国内勢力の妥協の産物であり、政権運営能力も治安維持能力も低かった。ハドラムウト州など東部では「アラビア半島のアル＝カーイダ（AQAP）」が勢力を拡大し、首都サナアでも過激派によるテロや誘拐が多発するようになった。警察力は低下し、街中には所持が禁止されているはずの銃器が溢れ、市内の治安は次第に悪化していった。



▲サナア旧市街 世界遺産サナア旧市街の自宅。この景色はもうない。



▲武器露天商 市街地で大っぴらに弾薬等を売っている。

続いて、物価高騰と汚職である。2011年以前と2014年を比べると、主食であるクダム（パン）が1個5イエメン・リヤルから20リヤル、市民の足であるダッパーブ（乗合バス）が20リヤルから50リヤルなど、物価は平均で1.5倍、品物によっては3.4倍に跳ね上がった。（1円は約2リヤル）

一方で給料は変わらず遅延や未払いも多く、また汚職も横行し、スーク（市場）などで「これでは暮らしていけない」、「サーレハ時代のほうが良かった」と言う声が強くなっていったのを覚えている。ホーシー派が台頭してきたのは、このように国民が生活に苦勞している時だった。

ホーシー派運動

2014年1月に国民対話が終了し、イエメンが6州の連邦制になることが決定すると、ホーシー派の不満が爆発する。これまで彼らは険しい山岳地帯にあって社会経済開発から取り残されており、この国民対話で自分たちの取り分を増やすべく働きかけていた。しかしながら結果は、彼らが渴望していた紅海沿岸の港も天然資源地域も獲れなかったからだ。一方のハーディー政権は、国連、主要先進国、GCCというパトロンに偏った支援と、「民主化プロセスを推し進めるべき」という圧力に押され、ホーシー派を宥めきれなかった。かくて同派指導者のアブドゥルマリク・アル＝ホーシーは、「外国勢力の不干渉、汚職撲滅、治安の回復」を掲げて蜂起した。

ホーシー派は、北のサアダ州から首都サナアに向かう道すがら、周辺の部族や集落を抱き込んでいった。友人から聞いた話では、村にホーシー派の使者が来て、「我らの陣営につくか否か。つくなら面倒をみよう、つかねば知らぬぞ」と持ち掛ける。そこで



▲ホーシー派検問 市内の大通りのホーシー派検問に並び。対応は悪くなかった。

村のシェイフ（首長）や男衆が集まって協議し、ある村は資金を拠出し、また別の村は若衆が参加する。まるで時代劇のようだが、これがイエメンで伝統的に使われてきた勢力拡大の手法なのである。折からの経済難も手伝って、中央政府の味方としても旨みはないと判断してホーシー派につく部族も多く、また途中からはサーレハ前大統領派もこれに与し、ホーシー派集団は雪だるま式に増えて首都サナアに雪崩れ込んだ。

この時点でホーシー派は、サアダ紛争時のものから変質し、アブドゥルマリクの唱える世直し運動に共鳴した北部部族集団による「ホーシー派運動」とも呼ぶべき事象に発展した。ホーシー派について、メディア一般では「イランに支援されたシーア派系反政府武装組織」が常套句だが、これには違和感を覚える。この頃（2014年）のイエメン国内におけるホーシー派の認識とは、一義的にはサアダ州を中心とする北部山岳部族民による（彼らの利益確保のための）世直し運動のことであり、宗派やイランの影響云々は人々の意識に薄かったからだ。

首都制圧後

2014年9月のホーシー派による首都制圧以後、サナア市民の間には、部族民（田舎者）に支配される屈辱感がありながら、さりとして武力で挑んでも勝てないだろ



▲改造ピックアップ ピックアップトラックを改造して戦闘車両に。ここでも日本車は人気。

うと、現状を容認していた感がある。ホーシー派も、政権を奪取する意図はあまりなく（彼らは自分たちに国家運営能力はないと自覚し、その責任を負うことも避けていた）、外から圧力をかけて自分たちの要求が受け入れられれば良かったのである。

しかしながら、現状に不平不満を抱く部族を吸収して膨れ上がったホーシー派の勢いは止まらず、2015年1月には大統領府を包囲してしまい、2月にハーディー大統領が南のアデンに逃れると、これを追うように南進して勢力を拡大していった。この頃になると、ハーディーの支持は低下し、他方ホーシー派にもやり過ぎの感が出ていた。

そこに登場したのが、サーレハ前大統領の息子アフマドである。3月に彼のポスターが街頭で無料配布され始めると、曲がりなりにも安定していたサーレハ時代を投影し、人々の中にはアフマドを求める声が高まっていった。

空爆と内戦

しかしながら、3月26日から突如始まったサウジ主導の空爆は、絶妙に保たれていた勢力の均衡を一気に崩してしまった。今や各勢力は、自分の立ち位置も最終目的も分からないまま撃ち合っている。

空爆が3か月以上続き停戦の目途が立たない中で、死者は3,000人を超え、電気・ガス・水等のライフラインは壊滅、国民の80%が何らかの支援を必要とするという、イエメンはかつてないほど悲惨な状態にある。

日本に帰って驚いたのは、イエメンを含め中東問題の扱いの小ささもだが、現地での実感と異なる解説が多いことである。イエメン情勢を理解するためには、その社会・政治的背景を踏まえた上で、現地の実状を丁寧に読み解くことが必要なのではないだろうか。



▲イエメン日本友好協会 2月によさこい踊りを披露。彼らの未来は？

5. センターの活動から

2015年GCC DAYS IN JAPAN 参加記

2015年4月23日
東京日比谷、ペニンシュラ・ホテル

2015年4月22日から24日までの三日間にわたり、東京で湾岸協力会議 (Gulf Cooperation Council) が主催するGCC Days in Japanが開催された。第二日目は "Promoting bilateral relations and understanding between the GCC and Japan" (GCC 諸国と日本間の相互理解促進) という主題で、東京日比谷のペニンシュラ・ホテルにて開催された。このGCC Days in JapanはGCCの主催であると同時に、日本外務省が後援し、東京大学中東地域研究センターも非公式ながら協力している。具体的には、4月23日のSession 2「高等教育、科学研究、技術移転の分野における協力」に、本センターの高橋英海教授は司会として、辻上奈美江特任准教授は報告者として登壇したので、簡単に紹介したい。

このセッション2では、まずサウジアラビア大使館文化担当官のオジャーニ氏 (当初予定していたプハーリー氏が欠席のため登壇) がサウジアラビアなど湾岸諸国と日本の大学・学術機関・産業界との関係を概観し、経済的には豊かであるが技術移転の必要性を感じている湾岸各国に、日本が如何に対応していったのか、さまざまな経路について説明がなされた。こうした動きには、湾岸各国側の欧米重視偏重を是正する試みがあったとのことである。前国王の故アブドゥラー国王が創設した基金によって、多くのサウジ人が国外に留学し、近年は日本も留学先として徐々に重視されつつあるといい、現在は、約650人のサウジ人大学生が日本に学んでいる。

続いて本センターの辻上特任准教授は、「高等教育分野における日GCC協力と次世代へのインパクト」と題する報告を行った。氏は日本国内の大学が少子高齢化、18歳人口減少により危機に直面している現状を

紹介し、一方で、湾岸諸国は平均年齢が世界平均値とほぼ変わらない段階で、若者が多く、より多くの高等教育機関を必要としている現状を取り上げ、両者の直面している状況が大きく異なることを指摘した。つまり、入学者の現象に悩む日本の諸大学は、状況が許せば湾岸諸国の大学生受け入れを期待するともいえるのである。こうした状況の下、東京大学とGCCとの協力関係は深まっており、2011年に総合文化研究科内にスルタン・カブース・グローバル中東寄附講座が設置された。このほか、アラブ・イスラム学院によるアラビア語授業の無償提供など、関係は深まりつつある。また、近年は社会科学分野においても共同研究事業が広まりつつある。辻上氏は、湾岸における家事労働者に関する研究や、日本とサウジにおける大学における女性教員の進出の展開に関する共同研究に自らもかかわった経験から、こうした分野における共同研究での手ごたえを感じているとのことである。また今後の日本・湾岸の両大学における人的交流を活発化する上で、学生交流の重要性を指摘した。氏は、2013年に本学学生を引率してプリンセス・ヌーラ大学を訪問し、学生は一週間にわたってアラビア語の授業を受講し、また大学内外において



今のそして生のサウジアラビア社会と触れ合う機会を持つことができた。そこで彼女らは一見するとヴェールをまとって控えめなサウジ女性が、如何に精力的に活動しているのか目の当たりにし、サウジアラビア社会に対する見方を大きく変えたという。このように、草の根からの交流が、今後の湾岸諸国と日本の関係の深化に大きく影響を与えるものであり、辻上氏はさまざまな方面からの支援が期待されると述べた。

このGCC DAYS IN JAPANには、湾岸諸国の大使館関係者、研究機関、実業界、報道機関など幅広い参加が見られ、今後の日本と湾岸諸国の一層の関係強化・交流の活性化が大いに期待されていることがうかがえた。こうした状況のなか、GCCの一員であるオマーン国からの寄付によって支えられている本センターの果たす役割は、今後一層大きなものとなると思われる。

(執筆：阿部尚史)



6. そのほかの便り

(1) 駒場博物館におけるオマーン展

「Omani Corner at Komaba」の 展示入れ替えについて

2014年9月に、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部付属の駒場博物館1階ロビー内に設置されたオマーン展「Omani Corner at Komaba」は、オマーン大使館および中東地域研究センター関係者の協力によって、一年に1、2回、若干の展示入れ替えを行います。現在、近藤洋平前特任助教の尽力で入手した、オマーンの伝統的な「ハレの日」の衣装が展示されております。

開館時間は10:00から18:00で、入場は無料です。一度訪問された方も是非またお立ち寄りください。



(2) スルタン・カブース・ローズ

2014年5月にハーリド・アル＝ムスラビ駐日オマーン国大使より寄贈された「スルタン・カブース・ローズ」が、一年経った今年5月、美しい花を咲かせました。今後の成長を楽しみに見守りたいと思います。このスルタン・カブース・ローズは、駒場キャンパス初年次活動センター前の花壇で大切に育てられていますので、皆様も5月半ばの薔薇の季節にぜひお越しください。



(3) 杉田英明教授、ザード首長書籍賞を受賞

本センターのセンター長である杉田英明教授（東京大学大学院総合文化研究科）の『アラビアン・ナイトと日本人』（岩波書店、2012年）が、アラブ首長国連邦アブダビ首長国の第9回ザード首長書籍賞（Sheikh Zayed Book Award）の「他言語によるアラブ文化賞」（Arab Culture in Other Languages）を受賞しました。全1000頁を越える本書は、日本人の『千一夜物語』受容に関する金字塔的研究で、膨大な文献を渉猟した緻密な文献学的研究の成果です。日本からは杉田教授のほか、元オマーン大使の埴治夫氏による、ノーベル文学賞作家であるナギーブ・マフフーズのカイロ三部作の翻訳（『張り出し窓の街』『欲望の裏通り』『夜明け』いずれも国書刊行会、2011、2012年）が、同「翻訳賞」を受賞しました。日本のアラブ文学・文化研究の発展に尽力されたお二人にお祝い申し上げます。

●UTCMEs スタッフ紹介（平成27年9月30日現在）

〈スタッフ〉

杉田 英明（センター長、兼務教授）
森元 誠二（客員教授）
辻上 奈美江（特任准教授）
瀬口 美加（事務補佐員）

長澤 榮治（副センター長、兼務教授）
高橋 英海（兼務教授）
阿部 尚史（特任助教）

〈UTCMEs 運営委員〉

杉田 英明（委員長、大学院総合文化研究科教授）
羽田 正（東洋文化研究所教授）
矢口 祐人（大学院総合文化研究科教授）
高橋 英海（大学院総合文化研究科教授）

長澤 榮治（東洋文化研究所教授）
石田 淳（大学院総合文化研究科教授）
菊地 達也（大学院人文社会系研究科准教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

杉田 英明（委員長）
遠藤 泰生（大学院総合文化研究科教授、グローバル地域研究機構長）
矢口 祐人

石田 淳
松尾 基之（大学院総合文化研究科教授）
高橋 英海

●発行者情報 UTCMEs ニュースレター Vol.7 平成27年9月30日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441
<http://park.itc.u.tokyo.ac.jp/UTCMEs/>

印刷：JTB印刷株式会社

〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL：03-5715-0900 FAX：03-5715-0909